

コロナ制御時代に 獲得しておかなければ ならないものは何か

続いてコロナ制御時代に私たちが獲得しておきたいものについて整理してみます。

1) 地球に住まう人類として

今回私たちが、人間の世界は地球や自然と独立にあるのではなく、それらとの関係の中で常に人類以外の無数の隣人とともに生きているのだということにあらためて認識しました。

そう考えると、今回の新型コロナウイルスとの関係性は、決して「戦争」ではないと思われまます。

人間界への感染性と病原性を持ったウイルスの侵入は自然界ではごく当たり前に起こりうることであり、戦争のように人為的に避けられるものとは異なりまます。

そしてそれは殺戮合戦でもありません。もちろんウイルスによって命を奪われる人間が大勢いることは事実です（感染した人間が死んでしまえば畜生するウイルスもいずれ死んでしましますが）。

しかし「ウイルスは我々を滅ぼす計画や戦略を持った敵ではなく、単に、馬鹿みたいに自己複製をするメカニズムしかない」「スラヴォイ・ジジエク」ものです。あくまでも私たちの対応は今後感染を避け、免疫力をつけることでウイルスから身を守ることでしかありません。

コロナ制御時代においては以上のような視点・視野を身につけておかなければならないのではないのでしょうか。

2) 社会人として

私たちは社会を、さらには国を構成する存在として、私たちにとって本当に大切で必要なもの、私たちの命と生活を支え豊かにし、楽しさと潤いとゆとりを生むものを育て維持するための取り組み、活動を大切に、人とカネとモノの配分に配慮していかねければなりません。税金の使い道に目を向け、様々なタイプの次なる災禍に耐えられる社会づくりへ、コロナ制御時代には向かっていくべきではないのでしょうか。

3) 地域人として

新しい状況に立たされた地域行政は手探りの対策を行わねばならない場面が多くありまます。その中で住民の不安やそれに基づく要望や期待に懸命に応えようとしてきたと思えます。それらに対して意見や要望、時に批判が寄せられました。

しかしコロナ制御時代においては、住民の側はあらゆることに関して行政に対して求めるだけの、批判するだけの存在・態度でい続けるのではなく、地域の経済や文化や生活を共に考え創り上げていく関係性が必要ではないでしょうか。行政は無謬ではありません。互いに手を結び、なにものかを協創してゆくこと、そうした協働・協創の関係が醸成されていくべきと考えまます。

4) 家庭人として・個人として



諏訪中央病院 副院長 高木宏明

考察「ビヨンド・コロナ」①

この災禍をくぐり抜けて 私たちは何を獲得していくのか？



自分自身と家族を感染症から守ることのできる知識とスキルを身につけ、新しい知見に合わせてブラッシュアップしてゆかねばなりません。

賢明さと さらなるやさしさ… 知識・意識・良識

ここまでの①②③で、コロナ制御時代に私たちがどこにあらためて価値を置き、何を失わずにその時代を迎え、その時代に向けて何を獲得していったらいいのか考えてまきました。

ここではそうしたコロナ制御時代の地平から振り返って、これからの第2、第3波の中で私たちが身につけておきたいものについて考えてまきました。

結論から言え、それは「賢明さとさらなるやさしさ」であろうと思えますし、それは知識と意識と良識として定着させたいものと考えまます。

1) 知識

コロナウイルスもインフルエンザウイルスも飛沫を直接（飛沫感染）、あるいは間接的に物などを介して（接触感染）がその基本感染経路ですから、そこへ対策を集中させることが重要です。

そのために手洗い・手指消毒と感染者（および感染したことが疑われる人）がマスクをすること（これを咳エチケットと言います）流行が始まった程度で3密を避けることが大切でまます。マスクは、自分が感染者の場合に感染させないツールとしては効果が高いですが、人から感染を受けないようにする効果については限定的とされてまます。過信せず手洗い・手指消毒をもっと大切にまします。

一方で100%完全な対策は取り得ません。少しでもリスクを下げるという考え方を身に付けまします。

リスクはどのように測るのか。それは例えば地域の流行の状況、感染経路の分かっている感染者がそのうちどれくらいいるのか、今自分がいる場所とどれくらいリスクがあるのか（感染者がどれくらいいるのか）、陽性者がいるとしたら飛沫感染を受けやすい環境かどうか、例えば人と人の距離・滞在時間・換気程度など、

コロナ後の楽しいこと
コロナ後の不安の日々



ビヨンド・コロナ（コロナの向こうへ）は始まっている

茅野市北山地区・福祉推進研修会にて（2020年8月3日）
賢明さを身につけ、やさしくあたたかい支え合いの地域づくりのために

安全な地域を創りまます。自分と家族を守り、地域の隣人を守る。お互いの相違を受け入れあい、お互いの生活と価値観と自由を尊重する。そうした中で「このころの感染症を防ぎ、地域として感染症に対処する。感染者は周囲への感染の広がりを防ぐ行動を取り、必要な療養と治療のための環境と時間を持つ。職場・会社・地域は感染者のみならず体調に不良を訴える隣人・仲間へ回復のための治療と療養のための環境を確保する。

「かかったら休む」ことができる地域、感染禍においては誰もが「助けて」の声が上げられ、必要な社会的支援を受けられる地域社会であることが必要だと言えまます。

第2波、第3波へ
コロナ制御時代に
コロナで死なないために

もしコロナウイルスに感染した場合、このウイルスは先にも述べたように高齢者や基礎疾患を持った方々の命を奪う傾向がありまます。この場合の基礎疾患として糖尿病、心不全、呼吸器疾患（COPD）慢性閉塞性肺疾患等、透析を受けている方、免疫抑制剤や抗がん剤等を用いている方が挙げられてまます。ですから、こうした状況の方々は特に気を付ける必要があるわけまます。

心不全を起す元の病気としては高血圧・糖尿病・脂質異常症・喫煙・運動不足などがあり、またCOPDのかなりの部分は喫煙が関係してまます。透析を受けるようになる方のかかなりの部分にはやはり高血圧、糖尿病、喫煙などがありまますし、がんの発症に糖尿病や喫煙が関与していることも明らかになってまます。

残念ながら感染してまました場合、命を落とさずに回復するためには、高血圧・糖尿病・脂質異常症・運動不足・喫煙などといった生活習慣からくる問題を少しでも減らしておく工夫と努力が必要になりまます。

ビヨンド・コロナ、
コロナ制御時代に
人が自由に移動し、
働き、会って語り、
笑い、歌い、踊る

ここまでの考察の内容をまとめてまます。人間の豊かで楽しく生きがいある人生のために何が本当に必要なことなのか、社会的に整えなければならない道、個人として考えていくべきこと、これをコロナ流行第2波・第3波の中にあっても考え続けまします。

そして、移動の自由、外出の自由、外での交流や活動の自由、学ぶ自由の意味の大きさを実感できた今回の災禍をくぐり抜けていく過程で、こうした自由が享受されていない方々に向けて、「自由が広がる」よう地域づくりを進めていまします。

世界中で環境なき共通の災禍と向き合ったことを大切な経験として活かし、効率第一主義、一國中心主義などから生じる対立・争いの構図を変えていく、そうした世界平和のための連帯を構築していまします。

参考文献

・速水 融「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ人類とウイルスの第一次世界戦争（藤原書店2006年）
・パオロ・ジョルダノ「コロナの時代の僕ら」（飯田亮介訳 早川書房2020年）
・岡部信彦・和田耕始編集「新型コロナウイルスパンデミックに日本はいかに立ち向かってきたか 1918年スペインインフルエンザから現在までの歩み」（南山堂2020年）
・スラヴォイ・ジジエク「パンデミック 世界をゆるがした新型コロナウイルス（斎藤幸平監修・解説 中林敦子訳 株式会社Pヴァイン2020年）
・大澤真幸「思想としての（新型コロナウイルス）」（川出書房新社2020年）
・宇沢弘文・鴨下重彦編「社会的共通資本としての医療」（東京大学出版会2010年）
・岡田幹治「感染者の99%が無症状か軽症 ウイルスとの共生をめざせ」（週刊金曜日2020年7月3日号）
・船橋洋一「強い社会」が決する国々の興亡 新世紀
・多和田葉子「民主主義と透明感」（文芸春秋2020年7月号）
・柳家高太郎「ガラケー派のオンライン」（同上）
・原田マハ「静かな生活」（同上）
・浅井 隆「映画館は社会のインフラだ」（同上）
・鈴木書子「ゲーム・チェンジャー」（同上）
・ビル・ゲイツ「ワクチンなしに日常は戻らない」（同上）
・磯田道史「世界一の「衛生観念」の源流」（同上）
・エマニュエル・トッド「犠牲になるのは若者か、老人か」（同上）
・広野真嗣「国家の命運を託された三人の研究者ドキュメント 感染症「専門家会議」国民と政府を相手に奮闘した四か月」（同上）
・柳田邦男「コロナ対策再検証 この国の「危機管理」を問う」（同上）
・界地政学特別編（同上）
・ヤマザキマリ・中野信子「コロナでバレた先進国の「パンクの色」」（同上）
・小林慶一郎「検査・追跡・待機」こそ最大の景気対策だ」（同上）
・安田晴俊「困窮する外国人労働者」（同上）
・出口治明「リモートが「オッサン文化」を破壊する」（同上）
・倉本 聡「コロナ大戦・考 抜けるような本物の空の蒼」（同上）
・有働由美子・宮田裕章「コロナLINE調査で見えたこと」（同上）
・オルガトカルチュク「窓」小椋彰「世界2020年7月号」
・山本太郎「パンデミック後の未来を選択する ウイルスの目線からの考察」（同上）
・田中 純生「弱さの底に降りて行く カミュ「ペスト」に寄せて」（同上）
・鈴木宜弘「食料自給という政治責任の再確認 コロナショックと農業政策」（同上）
・藤田孝典「生活保障のさらなる徹底を 現場からの報告と提言」（同上）
・伊藤周平「可視化された医療崩壊 なぜ、かくも脆く？」（同上）
・土居丈朗「反グローバリズムや「社会主義」化はコロナ後の解ではない」（中央公論2020年7月号）
・山崎正和「21世紀の感染症と文明 近代を襲う見えない災禍と、日本人が養ってきた公徳心」（同上）
・村上陽一郎「近代科学と日本の課題 コロナ後をどう見通し、つづいてどうするか」（同上）
・多和田葉子「不安への答え」（同上）
・パルヴォ・ヤルヴィ「不安あふれる世界にクラッシュ音楽がもたらすもの」（同上）
・鎌田 實「介護崩壊を防ぐために」（同上）
・平野俊夫「医療体制を整備し、COVID-19を克服せよ 集団免疫とワクチン・治療薬の最新線」（同上）
・堀 成美「医師の心を折る「診療前」の問題群」（同上）
・西浦 博「次の大規模流行に備え、どうしても伝えておきたいこと」（同上）
・宮田裕章「ビッグデータが拓く未来の医療」（同上）
・大澤真幸「新しい生活様式」（自治共ニユースN 507）
・斎藤幸平「コロナ危機が拓く未来」（インタビュアー 保険医新聞2020年6月25日）
・「第2波に備え、今こそ医療・感染症対策の立て直しを」（保険医新聞2020年6月25日）
・櫻井 滋「避難所における感染症対策「3密」回避に有効なリソースとセメントとは」（インタビュアー 週刊医学界新聞2020年7月6日）

寄稿